

主体化の複数性としてのディアスポラ——雲南ムスリム移民を事例として

木村自（大阪大学人間科学研究科）

要旨

木村の報告は、雲南ムスリム移民が自らの移住と集合の経験を語る際の語り口の複数性を切り口として、ディアスポラ概念を再考しようとするものである。グローバリゼーションの一つの特徴は「脱領域化」にある。脱領土化は「土地と文化・アイデンティティとの『自然』な関係の消失」を意味し、その「脱領域化」によって産出される主体は、異種混交的な主体ということになる。こうした異種混交的な主体という概念は、近年ディアスポラを分析する際のキーワードとなっている。すなわち、「土地と文化・アイデンティティとの『自然』な」結びつきを強調する、「もう一つのネーション」としてのディアスポラではなく、「異種混交的な主体」としてのディアスポラを肯定的に提示していこうとする考え方である。ディアスポラをめぐる、「本質性」対「異種混交性」という対比構造である。しかしながら、故郷からの離散を生きる人々は、「本質性」か「異種混交性」かのいずれかの主体構築がなされるわけではない。むしろ、「本質性」も「異種混交性」も、彼らが対面する社会関係のなかで現出するナラティブ・ロジックとして存在しており、ディアスポラをめぐるのは、彼ら自身がつむぎだす主体化のロジックの複数性を抽出する必要がある。本報告では、雲南省からミャンマーへ移住して、さらに台湾へと再移住した雲南ムスリム移民を取り上げ、彼らのナラティブ・ロジックにおける「異種混交的主体化」「ナショナルリズム的主体化」「イスラーム・コミュニティとのネゴシエーション」という、三つの主体化プロセスを提示した。その上で、「本質性」対「異種混交性」という、ディアスポラの主体化の対立構造では、ディアスポラを分析できないことを示した。